

文相当句を承ける古代語の「とす」覚書

辻 本 桜 介

1. 検討対象

古代語では、文相当句と見做せる形を助詞トが承け、そこにサ変動詞「す」が述語として続く形が時折用いられるが、その文構造や意味はよく分かっていない。たとえば次のように動詞終止形を承ける「とす」はどういう構造を作っているのだろうか。

(1) 是を以て法を勸ふるに、皆死罪に当れり。如此在れども慈び賜ふと為て〔慈賜止為而〕一等輕め賜ひて、姓名易へて遠流罪に治め賜ひつ。(宣命・十九・37)

(2) その母、長岡といふ所にすみたまひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。(伊勢・八五・188)
次のような「むとす」とほぼ同じような意味で取って、「…しようとする」のような訳を当てても通るように見えるが、「む」は無い。

(3) …吾が子為て皇太子と定めて、先づ君の位に昇げ奉り畢へて、諸の意静まり了てなむ後に、傍の上をば宣りたまはむと為てなも〔宣牟止為氏奈母〕抑へて在りつる。(宣命・三・6)

(4) 寝待ちの月の山の端出づるほどに、〔夫兼家は〕出でむとする気色あり。(蜻蛉・上・112)

「むとす」と「動詞終止形+とす」とが類義の関係にあることは認めて良いだろうが、助動詞「む」の有無は文構造の違いを示唆している。

試みに『時代別国語大辞典上代編』の「す（サ変）」項目を確認すると、

(3) (4) の「むとす」については「㊦まさに発動しようという状態にある。ムトスまたはジトスの形で用いられる」とある。ここには「じとす」という形の存在も同時に指摘されているが、「じとす」は桜井(1981: 199)が「用法の範囲も狭く、発展も見なかった」とするようになり、あまり多くは見かけない形である。

古代語の「とす」は、動詞終止形やム・ジを承けるものの存在は一応知られているものの、「むとす」を除けば詳細な分析が行われたことは無く、また、前接語には他にどういった要素が現れるかといったことも全く不明である。本稿では、名詞以外の要素を承ける古代語の「とす」の用例を収集し、それらを文相当句を承けるものと見做して、用法の分類案を示すことにしたい。

表1 「とす」が承ける文相当句末の形式

		上代	中古			合計	
			散文系資料	歌集	訓点資料		
終助詞	カ			4	14	18	
	ヤ	1			1	2	
助動詞	繫辞	ナリ(形容動詞語尾含む)			20	20	
		態				4	4
		シム(命令形)			1	1	
	法	ム※	15	240	293	262	810
		ジ	5	20	10		35
		ベシ				1	1
		ベシ(連体形)		1			1
		マシ				1	1
		マジ				1	1
		マジジ	1				1
	極性	ゴトシ				3	3
		ズ	1		1	4	6
	相	タリ				2	2
		テアリ				1	1
		ヌ				1	1
リ				1	3	4	
形容詞				2	11	13	
動詞	状態動詞(「あり」)				3	3	
	動作動詞	4	14	26	31	75	
	動作動詞(連体形)				1	1	
	動作動詞(命令形)	7	2	2		11	
連用修飾語			4		5	9	
合計		34	281	339	370	1024	

※「むとす」の用例は大量にあるので、中古の散文系資料はCHJ収録の古代語資料のみの調査にとどめた。中古の歌集・訓点資料と上代資料の調査は、他の形式と同様に、稿末の資料一覧を調査対象とした。「むとす」についての詳細な検討は別の機会に行いたい。

2. 用例の概観

従来、文相当句を承ける「とす」の用法に言及する研究は少ない。どう

いった資料に、どういった形の用例があるのか。まずは全体を俯瞰するところから始めることにしよう。

表1では、本稿末に示す古代語資料から得られた「とす」⁽¹⁾の全例⁽²⁾において、前接する文相当句末の形式の出現状況を示した。一定量の用例が出る中古の状況に関しては、散文系資料・歌集・訓点資料のそれぞれに分けて示してある。用例の大半を占める「むとす」については、この形で複合辞化し独自の意味・用法を担っていると考えられるので⁽³⁾、詳細な検討は別の機会に行うこととし、以下ではそれ以外の形式についての検討を進めたい。

さて、表1を見ると各種の形式が「とす」の前接語として生起することが分かるのだが、特に、本稿冒頭で掲げた(1)(2)のように動作動詞の終止形を承ける用例が目立つ。それ以外にも、形容詞や形容動詞のような状態性の述語が訓点語に多いこと、終助詞は疑問を表すもの以外は見出せないこと、ジヤ動作動詞の命令形を承ける用例がやや多く現れていることなど、いくつかの傾向を指摘することができる。これらの傾向をどう整理して理解すべきか。以下で試案を示そうと思う。

3. 先行研究

文相当句を承ける「とす」を扱った研究は少ない。管見に入ったのは、

- (1) 助詞トにサ変動詞「す」が接した形を抽出した。係助詞等が介在したものは採っていない。
- (2) 歌集の調査結果の中には重複歌がしばしばあり、若干の字句や表記の違いを含むことがあるが、同じ詠み手による1度の詠歌であるから、1例として数える必要がある。多少恣意的な判断ではあるが、勅撰集に他の歌集との重複歌がある場合は、勅撰集の方の用例を採取した。
- (3) 「むとす」はひとまとまりで助動詞相当の複合辞になっていて、次のように無情物の動きを表す用法にも拡張している。これは現代語の「…(よ)うとする」と同様である。
 - (i) 岡宮に御宇しし天皇の日継は、かくて絶えなむと為 [加久弓絶奈牟止為]。(宣命・二十七詔・51)
 - (ii) 日が暮れようとしている。

「動詞終止形+とす」に言及する鈴木（1977）・関（1993）・中村（2017）のみである。順に見ておこう。

鈴木（1977: 354-356）は、平安時代に見られる「として」が次のように動詞終止形に付く例を「因果関係」を示すものとし、また前件と後件に「逆述語関係」があるとしている。

- (5) 我レ大王の国土の人民を為ク^{助也}として、種種の病を治（め）て、悉ク安隱に（あら）令（め）て、漸ク次ギに游行すとして其の空沢に至（り）て、見レば一の池有り、名をば〔曰〕野生といふ。

（金光明最勝王經・西大寺本・179-22、鈴木 1977: 355 の（12 d））

「因果関係」は、前件の「人民を助ける」が原因（あるいは理由、動機か）となって後件の「種々の病を治める」が生じるとの捉え方かと思われる。また「逆述語関係」については「被修飾語の動作を主語の対象として、それが如何なる情態にあるかを判断した関係が連用修飾であると考える」「述語の先行することを以って、この関係を〈逆述語関係〉と言うなら、逆述語関係こそ連用修飾句格の本質であると言える」（pp.353-354）とのことであるから、(5) は前件と後件の語序を転倒させて「種々の病を治療するのは、人民を助けている状態にある」のような意味で捉えることができる、ということと言おうとしているのだろう。こうした見方が誤っているとは思われないが、たいていの副詞節は主節との間に「因果関係」や「逆述語関係」のようなものを見て取ることができるので、(5) のような「として」の特徴を押さえた記述とは言い難いように思う。鈴木はこうした「として」について「宣命や平安時代初期の訓点資料にのみ見えるもの」（p.355）とも述べているが、(5) 以外には文相当句を承ける用例を挙げていない。一定量の用例を観察して、「因果関係」「逆述語関係」といった把握が十分なのか検証する必要がある。

関（1993）は、源氏物語等から得た数例の「動詞終止形+とす」について、「…しようとする」という解釈ではなく「…している」という解釈が当たるとする。

- (6) いとやをら入りたまふとすれど、みなしづまれる夜の御衣のけはひ、やはらかなるしもいとしるかりけり。(源氏・空蟬・1-124、関1993: 355の掲出例に相当)

この用例の「入りたまふとすれど」を「入りなさろうとするが」のように訳すとすると、まだ部屋に入っていない段階で衣擦れの音がしたことになって不自然だというのである。しかし、この「…とすれど」が承けるのは「いとやをら入りたまふ」であろう。「とても静かに入りなさろうとするが、(失敗して)衣擦れの音がはっきり聞こえる」の意で取るのは特に問題ないのではないか。つまり、「いとやをら入る」という動作は行われていないが、「入る」に相当する動作は行われているという解釈が十分に可能であり、訳としてはやはり「…しようとする」が当たるように思える。関の示す解釈に従って「入っていらっしゃる(途中だ)が」のように取る必要があるのかは疑問である。ただ、「とす」が承ける動詞終止形の表す動作が実現しているか否かという着眼点自体は、この「とす」が作り出す複文の意味的な構造を考える上で重要であるように思える。また、関はこうした「動詞終止形+とす」が、「包むとすれど」「忍ぶとすれど」「隠すとすとも」などの逆接の言い方に集中することを指摘しており(pp.359-360)、この点も興味深く、重要と思われる。

中村(2017: 57-59)は、中古語における「動詞終止形+とす」の用例をいくつか示しつつ、トは「指定」の助動詞であり、「す」は「陳述」を表すとする解釈を示している。ここで言う「指定」や「陳述」がどういう働きのことなのか、中村は特に説明を行っていないが、引用助詞トと一般的な引用動詞とが結び付いた形とは異なることを言おうとしているものと思われる。

- (7) 池にすむ名ををし鳥の水を浅み隠るとすれどあらはれにけり(古今・672/中村2017: 57の(1)に相当)
- (8) 年ごとに逢ふとすれど織女の寝る夜のかずぞすくなかりける(古今・179/中村2017: 57の(2)に相当)

中村はこうした「動詞終止形+とす」がしばしば「動詞未然形+むとす」と同義に捉えられていることに対する不満を示し、(7) (8) の下線部をそれぞれ「隠れるのだが」「逢いはするのだが」と訳している。

確かに、存在しない「む」を勝手に補うような解釈を問題視するのは首肯できる。しかし、「指定」「陳述」のように定義のはっきりしない用語を出したり、たまたま当てはまりそうな現代語訳を示したりするだけでは、文法論的な説明としては不十分であろう。

以上の通り、先行研究をいくつか参照してみても「動詞終止形+とす」の意味は判然としない。表1で示したように動詞終止形を承けるものが多いのは確かだが、それ以外の要素を承ける「とす」に目配せる必要はないのかという疑問もある。「とす」の用例を一通り浚って、全体をどう分類・整理するかの一案を示すことが必要だろう。

4. 分類と用法の記述

本節では、文相当句を承ける「とす」を文法的観点から以下の①～⑤に分類し、それぞれの用法を記述する。①②③は引用助詞のトが構成要素になっているものと見られ、④⑤は接続助詞のトが構成要素になっているものと見られる。

- ①意図引用 (4.1.1)
- ②考えの内容の引用 (4.1.2)
- ③複合辞「かとすれば」(4.1.3)
- ④前件事態の完遂に向かう様を描写 (未完遂に終わることを含意) (4.2.1)
- ⑤複合辞「として」(4.2.2)

複合辞化している③と⑤を「とす」の用法の一環と見做すには問題もあるが、外形上「とす」を含むものはここで全て扱いたい。なお、調査対象とした資料の種類が多いので、以下で示す表では用例の出た資料のみを掲出している。

4.1 引用助詞「と」を構成要素とするもの

本項で観察するのは、引用助詞「と」を含む構造と解されるものである。厳密な分類は難しいが、以下で見る①②③の用法を認めることが可能だろう。

4.1.1 ①意図引用

最初に、藤田（2000）で言う「意図引用」に由来すると見られるタイプの①の「とす」を見よう。

(9) …早く往なむとて、「潮満ちぬ。風も吹きぬべし」とさわけば、
船に乗りなむとす。(土佐・十二月二十七日・19)

(10) 中納言は、わらはげたるわざして止むことを、人に聞かせじと
したまひけれど、それを病にて、いと弱くなりたまひにけり。
(竹取・55)

これらの「とす」において、サ変動詞「す」の意味は非常に希薄である。(9) のような「…むとす」は現代語の「…(よ)うとする」に近い意味を持ち、(10) のような「じとす」は現代語の「…まいとする」に近い意味と持つが、このように考えると、こうした「…と」を、主節主体の意図の内容を示す引用句に由来するものと見るのは自然だろう。とすると、「す」は何なのか。この点については、藤田（2000）に示される「意図引用」というタイプの引用構文に起こる現象を参考にすると、次のように考えることができる。

(11) a. 「あいつは公儀のイヌだ」と抜き打ちに斬りかかった。
b. 「斬り捨てよう」と抜き打ちに斬りかかった。

(藤田 2000: 356 の (17 b, d))

(12) a.? 「あいつは公儀のイヌだ」と努力した。
b. 「斬り捨てよう」と努力した。

(同：357 の (18 b, d))

(13) 太郎が妹の菓子を食べようとした。

引用句「…と」は、後続する「言う」「思う」等の表す言語内容を表すことが多いが、引用句の表す発話・思考と、述語句の表す事柄とが別々のことと解される場合もある（藤田 2000 はこの構造を第Ⅱ類引用構文と呼んでいる）。その中でも（11）（12）のように引用句の示す思考が述部の事柄を起こす引き金・動機となっているものを、藤田（2000: 350）は意図引用と呼んでいる。その上で藤田は、「…しようと」「…するまいと」という形を持つ意図引用では、（12 b）の「努力する」のような、事柄の表し方として具体性に欠ける述部が用いられうることを指摘し（p.357）、（13）のように使われる「…（よ）うとする」も（12 b）などの具体性に欠けた述語表現のものと同様と連続するとしている（p.361）。

古代の「…むとす」「…じとす」も以上の「…しようと」「…するまいと」と同様の経緯で生じたものと考えることができよう。すなわち、「…むと」「…じと」のように後続する述語の表す動きを直接的に引き起こす意図と解される形は、主節の動きの具体的なあり方を描写する働きも担い得たために、「す」のような具体性のない述語と結びつくことができ、やがて「むとす」「じとす」といった固定的な形を生み出したのであろう。

現代語でこの構造を作るものと解される「とする」は、おそらく「…（よ）うとする」「…まいとする」の2通りの現れ方が固定的になっており、そのほかの形は作りにくい。これに対し、古代語では次のような用例も、このタイプのものと同様と見ることができそうである。

- (14) 今宮、「幼き子に文を取らせて、淵瀬も知らせず責めさするは
[＝理非・適否を判断させないまま返事を要求させるのは]、かしこきわざかな。『聞きにくし [＝手紙を見なければ外聞がわるい]』とて、見よ』とすめりかし』とのたまふ。（宇津・藤原君・94）
- (15) 督の殿の御祈 [＝安産の祈禱を]、様ざま残るなくとせさせ給ふ。（榮花・二十五・下-194）
- (16) 然れども今大保は必ず仕へ奉るべしと所念し坐せ、多の遍重ね

て勅りたまへども、敢ふましじと為て〔敢末之時止為互〕辞び申し、復、受け賜るべき物なりせば祖父仕へ奉りてまし。(宣命・二十六・49)

- (17) 梵の音をもちて我を譬喩（し）たまひと善哉か釈迦文第一の〔之〕導師として是の无上の法を得たまひれども諸の一切の仏に随（ひ）たてまつらマ（し）として（し）たまふに而（も）方便の力を用（てせ）むとしたまふ。(妙法蓮華經・山田本・21-250)

表2では、大量に用例のある「…むとす」以外で、以上に見たような意図引用の構造と考えられる「とす」について、前接語の種類ごとに資料上の分布状況をまとめた。この実態から2つ、注目すべき点を挙げたい。

1つは、(14)のように動作動詞の命令形を承けるものが少し多めに出ている点である。(14)の「見よ」が「見させよう」のような意味で取れることからすれば、「命令形+と」も意図引用の引用句と解す余地は十分にある。現代語ではこういった形を作ると次のように不自然になるので、古代の意図引用やそこからの派生形式のあり方は現代語と異なる面があると見るべきだろう。

- (18)??太郎が窓を指差して、外を見ろとしている。

もう1つは、和文資料と訓点資料とで傾向の違いが見られる点である。それが端的に見て取れるのは「じとす」だろう。「じとす」は、用例は多くないものの、上代から中古まで各種の和文資料から得られるが、訓点資料には出ない。動作動詞の命令形を承けるものも同様の分布と見てよいだろう。訓点資料ではそうした固定的な形は無いようで、ある程度生産的に①の「…とす」が用いられたようだが、用例が少なく確かなことは言えない。次に示すようなものを一応①の「とす」に分類したが、次の4.1.2で見ると②の「とす」と見るべきなのかもしれない。

- (19)〔如〕世間の人の肴膳を以（て）福田に奉施して今世後世をして飲食乏（しき）こと无カラ令む（る）か為の故にとするか如く、今無尽の法食を以（て）世間（の）〔之〕供養を加持して諸尊に

奉施して、…（大毘盧遮那成仏経疏・445-589）

- (20) 普（く）一切の有情の〔に〕為にとして〔而〕布施を行ずること能は不。^ず（地藏十輪経・東大寺図書館本・113-10）

4.1.2 ②考えの内容の引用

次に見る②の「とす」は、「す」が「考える」「認める」等の意を持つ代動詞のように使われるものである。「…と」はそうした「す」の表す思考や認定といった言語行為の内容を示す引用句と解することができる。

- (21) 然るに謀れる庭に会らず、亦告げられねども、道祖王に縁れば遠流罪に配むべし。然れども其の父新田部親王は清き明き心を以て仕へ奉れる親王なり。其の家門絶つべしやと為てなも〔可絶其家門夜止為奈母〕、此の般の罪免し給ふ。（宣命・二十・38）
- (22) 謂く、解脱は有（り）や〔耶〕无（し）や〔耶〕、三宝は有（り）や〔耶〕无（し）や〔耶〕とする。是を名（づけ）て疑と為。（成実論・十四・174-20）
- (23) 我（れ）等無智の故に覚（ら）^ず不、亦、知（ら）不（し）て少（し）の涅槃の分を得て、^{み(づか)}自（ら）足（り）ぬとして、余を求（め）^ず不。（妙法蓮華経・龍光院本・88-2）
- (24) 水ノ中ノ月ノ若シトスルヲゾ、菩提ノ行ヲ行ストハイフ。（金光明最勝王経・西大寺本・99-3）
- (25) 无着は是（れ）見るを以て既（に）知見し已（り）て便（ち）勤メて大乘の行を修せ令（む）るに其の天親廻心に不肯。後の時に无着我小の疾有（り）として弟子を（し）りて往て天親を^{ヤリ}喚（ば）令（む）。（百法顯幽抄・114-14）
- (26) 思惟して自（ら）悟（り）ぬ（る）ときに、渴して願（ひ）し心、息（み）ぬ。行者も亦尔なり。若（し）智慧を以て、我無し・実法無（し）とする者は、是（の）時に顛倒の願ヒ息（み）

ぬ。(大毘盧遮那成仏経疏・110-159)

こうした用例は、主節主体の思考内容と解される点では4.1.1で見た①の「とす」と変わらないが、「…(よ)うとする」「…まいとする」のような意味で主体の意図を引くものではない点と、用例の分布が訓点資料に偏る点において、①とは区別する必要があると考えられる。

表3ではここで見ている②の「とす」の分布状況をまとめてあるのだが、これを見て分かるように、訓点資料(初期)に多い。漢文訓読語的な

表3 ②の「とす」の前接語と資料上の分布状況

		中古													合計									
		上代	歌集		訓点資料																			
			散文	歌集	続日本紀宣命	宇津保物語	内裏後番歌合(承暦二年)	日本紀竟宴和歌	四分律	成実論	金光明最勝王経(西大寺本)	妙法蓮華経(山田本)	金光明最勝王経註釈	大智度論		地藏十輪経(東大寺図書館本)	百法顯幽抄	漢書楊雄伝	大唐西域記	妙法蓮華経玄賛	法華義疏	南海寄帰内法伝	妙法蓮華経(龍光院本)	大毘盧遮那成仏経疏
終助詞	カ								14															14
	ヤ	1						1																2
助動詞	繫辞	ナリ					1	2	2	2			4		1		1		4		1	1	1	20
		タリ					1		1															2
	相	タリ(テアリ)							1															1
		ヌ																					1	1
		リ						1									2							3
	法	ズ	1		1					2								2						6
ベシ(連体形)			1																				1	
	ゴトシ								2	1													3	
形容詞						2		2	1	1	1	1	2	2									1	13
動詞	状態動詞(「あり」)								2							1								3
	動作動詞												2											2
	動作動詞(連体形)																		1					1
合計		2	1	1	2	3	4	24	6	1	1	8	2	2	2	2	1	2	5	1	1	2	72	

表現と言ってよいだろう。現代語の「…とする」が主として次のような書き言葉で使われているのも、その出自が平安時代初期の訓点語にあるためかもしれない。

(27) 同社は「消費者の健康への影響はない」としている。(BCCWJ/
神戸新聞 2002/6/22 朝刊)

ところで、現代語におけるこのような「…とする」については、藤田(2001)が詳細な分析を行っている。それに拠りながら、古代の②の「とす」が現代語の「…とする」とどう異なるかを考えてみたい。

藤田(2001)は現代語の「…とする」の特徴をいくつか挙げている。その一部を要約して示せば次のとおりである(例文は藤田の掲出するものを若干変更)。

i 極めてよく「…と言う」と書き換えられる。(pp.275-276)

(28) 関空は増便効果が見込めると {している／言っている}。

ii 「…と」にはもっぱら「判断」を述べる文が入り、感情表出の文、質問・勧誘・命令等の働きかけの文、眼前描写の文は入らない。(p.278)

(29) *善行は、さっさと出ていけとした。

iii 他者に向けての伝達行為を表すというような具体性が無く、対者を示す二格名詞と共起しない。(pp.279-282)

(30) 弘実は、菜穂子に、この花は曼殊沙華だと {言った/*した}。

iv “見解をとる”意を表すが、「…と見る」と違って、その見解が主体の内に留まらない。(p.283)

(31) 対策本部では、被害はなおも広がると {見た/*した} が、公表はしなかった。

i と iv によって、現代語の「…とする」は“発言”を表すということが知られる。ただし、ii と iii から分かるようにその“発言”は誰かに向けて声を発するような物理動作ではない。古代語における②の「とす」の観察にこれらの観点を導入するとどうなるか。結論から言えば、i と iv は認める

ことが出来ず、ii と iii は概ね認めることができる。以下で確認していこう。

まず i と iv について。解釈上、「…と言う」という訳を当てはめても意味の通るような用例が多いことは確かだが、確実に、言葉を外に出す意があると見えるものは見出しがたい。たとえば次の用例は「足りたと言いって余分を求めない」という訳でも問題なさそうだが、「足りたと思いって余分を求めない」という訳でも文意は通る。

- (32) 我(れ)等無智の故に覚(ら)^(ず)不、亦、知(ら)不(し)て少(し)の涅槃の分を得て、自(ら)^{み(づか)}足(り)ぬとして、余を求(め)^(ず)不。(妙法蓮華經・龍光院本・88-2)

次のように心的な動きに伴って生じる言葉を引く用例が散見されることに注目すると、思考内容を引用する形と見るべきかとも思えるが、はっきりしない。現代語の「…とする」のように発言を表すと見るべき根拠は得られなかった、という点を指摘するにとどめたい。

- (33) 是の人於(これ)か中に疑を生(し)^(も)て為し、有か為し、無かとす。此の疑成(り)ぬ(る)か故に能(く)三品を覆フ。(成実論・十五・101-17)

- (34) 十方の大菩薩の衆を愍(ふ)か故(に)道を行するに、恭敬の心を生(し)て、『是(れ)則(ち)、我(か)大師なり。』とす應(し)。(妙法蓮華經・龍光院本・131-4)

ii に関しては、表 3 で前接語の状況を確認したい。感情表出・質問・勧誘・命令を表すような形式が基本的に生起しないことが分かる。一般に漢文訓読語では感情表出に関わる終助詞が生起しにくい⁽⁴⁾、それでも、カ・ヤ以外のものが全く得られないのは特徴的であろう。なお、カの場合

(4) 大坪(2015)は次のように述べている。

訓読文では、和文で用ゐるカシ・ナ・ナム・バヤを用ゐず、カ・ガ・カナ・モノカ・ヤ・ヲヤなどを用ゐたが、カナ・ヲヤを除けば、他は例外的にしか用ゐられず、和文に比べて、終助詞の使用ははなはだ少い。(大坪 2015: 649)

は全て成実論に出現しており、“質問”ではなく次のように“疑い”を表すものばかりである。

(35) 不決定の心相続する(を)疑と名(づく)。尔の時に心決定(せ)不^ず。是(れ)机か是(れ)人かとす。是(れ)相続(して)心い信せ不^(ぬ)を以(ち)ての故に濁(と)ナス。(成実論・十四・175-34)

(36) 疑の時 或は有か、或は無かとす。是の不信に二種あり。一は疑(に)従(ひ)て生ずる。二は邪見に従(ひ)て生ずる。(成実論・十四・175-35)

古代語における②の「…とす」は、こうした用例が一定数表れることを重視するならば、現代語の「…とする」のように“判断”を述べる文を引用して“見解をとる”ことを表す形式と見るのは妥当でない⁽⁵⁾。“考え”を述べる文を引用する形という見方が当たるかと思われる。

最後にiiiであるが、②の「…とす」も現代語の「…とする」と同様に、対者を示す二格名詞等の成分と共起した用例は得られず、他者に向けての伝達行為を表すというような具体性は無いものと解される。

ちなみに藤田(2001: 284)は「通時的にはむしろ、「……ヲ～トス」「……ヲ以テ～トス」(ex. 和を以て貴しとす)のような語法がまずあって、その延長上にここでとりあげるような「～トスル」形式の表現が成立したと思われる」と述べている。確かに、古代語においてはヲ格成分と共起した「…を…とす」の用例も少なくない。

(37) もものはなのあしたに、ちちのみこ、太子ともろともにそのに

(5) 現代語でも次のように疑問の形は現れるが、形式としてはそのようになっていても、実際には疑問を抱いていることを言おうとするわけではなく、蓋然性のある主張を展開する形になる。

(i) 土製の貝輪は岐阜県の今宿遺跡に続き二例目。同センターは「装身具の貝輪をモチーフにした宝器は古墳時代に始まったとされてきたが、ルーツは弥生時代、既に東海にあったのではないか」としている。(BCCWJ/北海道新聞 2005/1/27 朝刊)

あそびたまふに、みことひてのたまはく、もものはなをやたのしびとする、まつのはをやおもしろしとする、と、太子、こたへたまはく、まつのはをおもしろしとす、…（日本紀竟宴和歌・64）

- (38) …又、問（ひしく）、『出家しては、何の等きをカ難（し）とする。』（と）。答曰、『出家して法を楽フを難（し）と為^す。』（と）。『既（に）楽法を得ては、復（た）何者^{もの}をカ難^すしと為^する。』（と）。（大智度論・848-5）

ただ、筆者が調査した最も古い用例を見る限り、次のようにヲ格を伴わない形で現れている。(39) は和文で最も古い上代の用例、(40) は訓点資料で最も古い用例である。

- (39) 又県犬養橋夫人の天皇が御世重ねて明き浄き心を以て仕へ奉り、皇朕が御世に当りても怠り緩ふ事無く助け仕へ奉り、加以、祖父大臣の殿門荒し穢す事無く守りつつ在らしし事、いそしみうむがしみ忘れ給はずとしてなも [忘不給止自亘奈母] 孫等一二治め賜ふ。（宣命・十三・28）
- (40) 生蘇（の）中（より）熟蘇出（つ）。熟蘇より醍醐出（で）て、最（も）精（きこと）第一なりとするが（ごと）ク、此の衣モ是（の）如シ。（四分律・480-2）

歴史上、「…を…とす」のようにヲ格成分が共起した形が先に存在したのかは不明である。

4.1.3 ③複合辞「かとすれば」

本項では最後に次のような「かとすれば」に触れておきたい。

- (41) 夏の夜の臥すかとすれば郭公鳴くひと声にあくるしののめ（古今・156）
- (42) うらちかみぬるかとすればしらなみのよるおとにこそゆめさめにけれ（重之集・128）

- (43) さらにだにふすかとすればあくるよをなにをあかすとたたくく
ひなぞ (源賢法眼集・18)
- (44) ひしくればいざとくねなん夏衣ぬぐかとすればあけぬといふよ
に (古今和歌六帖・266)

見出されたのはこれら4例のみであり、細かな分析はできないが、「…するかと思うと間もなく」のような意味を表す形式と思われる。後件では、前件の動きを妨げるような事態が述べられている。

おそらく4.1.2で見た②の「とす」に由来する複合辞であろう。とすると、和歌にしか現れない点も考慮するに、②の「とす」は相当に古い時期から使われていた形だったと考えられる。複合辞化という経緯を辿り、さらに歌語として固定的になるのにはそれなりの歳月が必要だからである。

4.2 動詞終止形に付く接続助詞「と」を構成要素とするもの

前項4.1で見た「とす」は、いずれも引用助詞トを構成要素とするものと見て問題ない。それに対し、本項で見る「とす」に含まれる「と」は、次のような接続助詞トと性質に近いもので、引用助詞とは考えにくいものである。

- (45) 大宮の内まで聞こゆ網引すと [網引為跡] 網子ととのふる [=
網子を統括する] 海人の呼び声 (万葉・十七・3957)
- (46) 鄙治めにと大君の任けのまにまに出でて来るし我を送ると [和
礼乎於久流登] あをよし奈良山過ぎて泉川清き河原に馬留め
別れし時に… (万葉・十七・3957)

これらのトは、前件の事柄の一部が後件で詳細に描写されるような意味的構造の中で、後続節の主体が前件の事柄の完遂に向かう様子を表している。動詞の終止形に接するという統語的な縛りの中で後件との間に一定の意味的な構造を生じている点から見て、接続助詞の一種と考えるべきものだろう。このようなトについては、竹内(2005)・吉井(2020)・勝又(2020)等が詳しく分析を行っている。以下で見る「とす」は、動詞終止

形に付くことや、主体が前件の行為の完遂に向かっているとの解釈が可能である点から見て、(45) (46) のような「と」に由来するものと考えられる。

4.2.1 ④ 前件事態の完遂に向かう様を描写（未完遂に終わることを含意）

まず④の「とす」から見よう。

(47) 葦間なるあるかなきかのうすらひはとくとすれどもむすほほれ
つつ（能宣集・408）

(48) つつむことある人 [=私が恋心を寄せる相手は]、里には制する
人 [=実家に私との恋愛を邪魔する人が]、みなかよりのほりた
りと聞けば、え行かざりければ、うちのつぼねにも忍ぶとすれ
ど、みなきこえて、人めをつつみければ、関やかたかりけむ。
（経衡集・168）

(49) 屏幔ひきおひやるとすれど、おほかたのけしきは、同じごとぞ
見るらむと、思ひ出づるも、まづ胸ふたがる。（紫・175）

これらの用例は、主節主体が完遂しようとしている動きを表す動詞の終止形に接続している⁽⁶⁾。3節で見たように、この「とす」については既に関(1993)や中村(2017)による考察があり、「とすれど」等の逆接の形に偏ることや、「むとす」と同じ意味で取るべきでないことなどが指摘されている。こうした指摘は妥当だろう。しかし、関や中村がこのタイプの「動

(6) 表4に示すように④の「とす」の用例と判定したものは41例あり、そのほぼ全てが動詞終止形に付くものであるが、1例だけ、次のように助動詞りを承げるものも含まれる。

(i) …すべらぎの おほせかしこみ 卷々の 中に尽すと 伊勢の海の
浦の潮貝 拾ひあつめ とれりとすれど 玉の緒の 短き心 思ひあ
へず … 板間あらみ 降る春雨の 漏りやしぬらむ（古今・1002）

この和歌では、勅命に従って（漁師が貝を集めるように）歌を収集したが、思慮が及ばないために（雨漏りのように）良い歌を採り逃しただろう、という内容が歌われている。「とれり」は撰歌を実際に行った意で捉えられるが、十分に完遂するところまでは達していないことも読み取れる。動詞終止形に付くものと同様の意味構造を持つものと見て問題無いだろう。

詞終止形+とすれど」を、実現した事態を表すものと解して、「…しているが」「…するのだが」のような意で取っている点はどうだろうか。次の用例を見たい。

(50) こひしさにつらさのそひておぼゆればわするとすれどわすれかねつも (為信集・16)

(51) 出づとせし身だに離れぬ火の家を君水尾にいかですむらむ (宇津・国譲下・773)

(50) (51) において、前接する「わする」「出づ」の表す行為は実現しているのだろうか。実現しているとするなら、後続内容に「わすれかねつも」「身だに離れぬ」とあることとは矛盾するように思える。

筆者の見る限り、和文資料に現れる「動詞終止形+とす」の用例は全て、前件の動きが後件で打ち消されるなどして完遂しないまま終わるものと解される。(47) の前件「とく」と後件「むすぼほる」や、(48) の前件「忍ぶ」と後件「みなきこゆ」は対義関係にあり、前件の行為が完遂せずに終わることが読み取りやすいだろう。(49) でも、もし幔幕で周囲を遮ることが完遂されているなら誰かが中を見ているなどということ想像する必要は無いわけだから、やはり前件「屏幔ひきおひやる」の動きは完遂していないものと解される。

ここで注意したいのは、前件の動きが少しでも開始局面を超えて実現の途中段階にあるのか、それとも開始局面にもまだ至っていないのかは、必ずしもはっきりするわけではないという点である。

(52) わが屋戸は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせし間に (古今・770)

(53) かうやうの御歩きは、忍びたまふとすれどおのづから事ひろごりて、後の例にもなるわざなるを、重々しき人数あまたもなくて、… (源氏・総角・5-294)

(52) の「待つ」は確実に開始局面を超えているだろう。待つ期間が長すぎて庭先が草木で荒れ果てたという内容で取る以外に無い。一方、(53)

の「忍ぶ」の表す行動は、おそらく多少は実行に移されてはいるのであろうが、少しも実行に移されていないとの解釈も無理ではない（噂が広がることが予測できる状況ならわざわざ隠し立てしようともしない、ということもありえよう）。

以上に見た通り、④の「とす」は、主節主体が前接する動詞終止形の表す行為を完遂に向かう様子を描くが、その動きの開始局面に達しているか否かを示す働きは無く、むしろ、その動きが完遂せずに終わることを予告する働きを担っている。

表4では④の「とす」の分布状況を示した。関(1993)が示したようにド・ドモ等の逆接形式を伴って現れる傾向が強いが、逆接形式が必ず生起するわけではない。前件事態が未完遂に終わるという含意を持つことによって「とすれども」「としけれど」「とすれども」のように逆接の形式を伴いやすくなっていると見るべきであろう。これらを個別に複合辞と見るようなことは、少なくとも古代の段階では適当ではない⁽⁷⁾。

ところで、表5から知られるように④の「とす」の用例は和歌にしばしば出現し、訓点資料ではほぼ用例が得られない。口頭語では出にくい形であり、歌語的な性格を帯びていたと考えられる。上代語での用例は見出せなかったが、和歌に多く出る点からすれば、伝統性のある表現だったのだろう。

(7) 中世にも④の「とす」は見られるが、形態的なバリエーションは乏しくなっている。国立国語研究所『日本語歴史コーパス』の「鎌倉時代編」から動詞終止形を承ける「とす」を抽出したところ、「とすれども」9例（今昔物語集8例、とはずがたり1例）と「とすれど」2例（宇治拾遺物語）のみが得られた。前接する動詞も「隠す」7例、「忍ぶ」3例、「置く」1例となっていて偏りが生じている。この時期には固定的な慣用表現となっていたと見るべきだろう。なお、古代のように和歌に偏るわけではなく全て地の文に現れている点は興味深い。

- (i) 其ノ後、此ノ事隠ストスレドモ、自然ラ人粗知ニケレバ、世ニモ聞エニケリ。(今昔・三十・431)
- (ii) 涙の雨雫と降りて、忍ぶとすれど、伏しまろび泣く気色を、男聞きつけて、あやしと思ひて走り来て、「何事ぞ」と問ふに、泣くさまおぼろけならず。(宇治・九・287)

表4 ④の「とす」の形態と資料上の分布と資料上の分布状況

	散文系資料						歌集						訓点資料	
	伊勢物語	宇津保物語	源氏物語	紫式部日記	浜松中納言物語	栄花物語	私家集	歌合	私撰集	勅撰集	後撰和歌集	後拾遺和歌集	願經四分律(岩淵本)	合計
「とし」+付属語(「て」以外)	1					1		2				2	3	
「とす」+付属語			1		1	2						0	2	
「とする」+「ほどに」						0	2					2	3	
「とすれ」+「ど／ども」			5	1	3	1	6	1	2			9	19	
「とすれ」+「ば」						0	1					1	1	
「とせ」+キ+付属語等		1				1	9		1	1	1	12	13	
合計	1	1	6	1	4	1	14	1	2	3	1	1	26	41

※私家集の「第三卷」「第七卷」は新編国歌大観の巻次を指す。

4.2.2 ⑤複合辞「として」

本節で最後に見るのは次のように現れる⑤の「として」である。

- (54) 王子い二の兄有(り)キ。大渠と大天と号(ばれ)キ。三(たり)の人同(じ)ク出(で)て遊(あそ)ぶとして漸ク山林の所に至(り)ヌ。(金光明最勝王経・西大寺本・196-7)
- (55) …漸ク次(つ)ぎに遊(あそ)行(ゆ)すとして其(その)の空(そら)沢(たに)に至(り)て、見(み)れば一(ひと)の池(いけ)有(あ)り、名(な)をば〔曰(い)ふ〕野(の)生(せい)といふ。(金光明最勝王経・西大寺本・179-23)
- (56) 悉(ことごと)ク皆(みな)現(ま)るに無(む)量の楽(がく)を受(う)くとしても受(う)用(よう)するに豊(とよ)饒(じょう)にして福(ふく)徳(とく)具(ぐ) (せし)メむ。(金光明最勝王経・西大寺本・39-18)
- (57) 我(われ)〔於(お)〕 往(むか)昔(こ)の無(む)量(りやう)劫(ごう)に〔為(な)〕 清(きよ)浄(じやう)の真(ま)法(ぽう)身(み)を求(もと)むとして、所(ところ)

愛の〔之〕物を皆悉ク捨すること、乃身命に至（るま）でして
心に（やぶさか）悻ルこと無かりキ。（金光明最勝王経・西大寺本・164-8）

(58) 譬（へ）ば慈母の其の子の病を憐むとして、憂念して捨て不スガ
如くする、是（の）如（き）相、是を菩薩の精進と為す。（大智
度論・888-13）

(59) 乃至阿鞞跋致地に到（り）ぬるときには、衆生を教化すとして、
諸仏を離（る）とも、咎無し。（大智度論・694-1）

(60) 譬（へ）ば火災の起るとき（に）、一切能く滅すこと无シといふ
が如く、汝（が）菩提行を修すとして精進する火（も）亦（た）
然（か）なり。（大方広仏華嚴経・361-20）

4.2.1 で見た④の「とす」と同様、動作動詞の終止形に接続する⁽⁸⁾のだが、
「として」という形で固定し複合辞化している。

表5で示す用例の分布状況から分かるとおり、用例の量は多くない。得
られた用例の大部分は金光明最勝王経（西大寺本）のものであり、文体的
な位置付けは難しい。

さて、前件と後件の意味的關係に着目す
ると、主体は前件の動作を完遂しようとす
る中で、その動作の一環として後件の動き
を起こしている。たとえば(54)の後件
「山林の所に至（り）ヌ」は、前件「遊ブ
 [= 歩き回る]」という行動の一部である。
(55)の後件「其の空沢に至（り）て」も、
前件「遊行す」という行動の一部である。
こうした「として」は現代語の「…際に」

表5 ⑤の「とす」の分布状況

上代		調点資料 (9C 頃加)			合計
延喜式祝詞	続日本紀宣命	金光明最勝王経 (西大寺本)	大智度論	大方広仏華嚴経	
1	3	24	4	1	34

(8) 次のように動詞に助動詞シムが付いた形（4例）も、動詞に準ずるものとして扱う。

(i) 即大王に白（し）て知（ら）シむとして斯の苦悩の事を陳す。（金光明最勝王経・西大寺本・197-4）

に近い意味で取れる。(56)であれば「皆が実際に莫大な安楽を受ける際にも、その皆が豊かに、かつ功德を伴った形で受け取れるようにしよう」のような訳を与えることができよう。(57)～(60)も同様に解釈できる。

このような意味構造は、本項の冒頭で見た次のような上代語のトの用例と共通している。

(61) 大宮の内まで聞こゆ網引すと [網引為跡] 網子ととのふる [= 網子を統括する] 海人の呼び声 ((45) 再掲)

(62) 鄙治めにと大君の任けのまにまに出でて来し我を送ると [和礼乎於久流登] あをによし奈良山過ぎて泉川清き河原に馬留め別れし時に… ((46) 再掲)

ただ、前件と後件との間に作り出される意味的な関係は、ここで見ている⑤の「として」の方が画一的である。たとえば、上代語のトは前件と後件とが文脈的に同一の事態と解されれば次の用例のように前件と後件とで主体が異なっても良かったようであるが(吉井 2020: 11)、⑤の「として」の用例は全て前件と後件とで同一の主語を取っている。

(63) 妹がり和我が行く道の川しあればつくめ結ぶと [附目緘結跡] 夜そ更けにける (万葉・八・1546、吉井 2020: 11 の (29))

あるいは、上代語の「と」は「…ながら」「…ていると」「…から」などと訳されるような場合もあって、前件と後件の意味的關係はやや曖昧であるが(竹内 2005: 180-181)、⑤の「として」の用例はほぼ全てにおいて後件動作が前件動作の一部になっている⁽⁹⁾。

(64) むささびは木末求むと [木末求跡] あしひきの山の獵夫にあひにけるかも (万葉・三・267、竹内 2005: 181 の例 61 に相当)

(9) 次の1例は例外的なものである。後件には「船乗る」という行為の一部と解される事柄は現れていない。これは「乗らむとして」のように訓読すべきものかもしれない。

(i) 大唐に使遣はさむと為るに、船居 [= 港] 无きに依りて、播磨の国より船乗ると為て [船乗止為豆]、使は遣はさむと念ほしめず間に、皇神の命を以ちて、船居は吾作らむと教へ悟し給ひき。(祝詞・遣唐使時奉幣・506)

このトの用例では、前件の「むささびが梢を目指して移動している」という事柄の後に、後件の「獵師に撃たれてしまった」という事柄が偶然に起きているように解される。「・ていると」のような訳が当たるだろう。⑤の「として」には見られない構造である。

ところで、⑤の「として」は和文に見える助詞トテが持つ次のような用法に似ている。

(65) かくて七、八年ばかりありて、[男は] また、おなじ使にさされて [=前と同じく御幣使に任命されて] 大和へいくとて、井手のわたりに宿りて見れば、前に井なむありける。(大和・一六九・412、拙稿2016: 43の(13a))

(66) 右衛門尉なりける者の、えせなる男親を持たりて、人の見るに面伏せなりと、苦しう思ひけるが、伊予国よりのぼるとて、[男親を] 波に落し入れけるを、[人々が] 「人の心ばかりあさましかりける事なし」とあさましがるほどに…(枕・二八七・443、同: 38の(5a))

(67) [源氏は] 大殿籠るとて、右近を御脚まゐりに召す。(源氏・玉鬘・3-119、同: 40の(7b))

(68) 男、女の衣を借り着て、今の妻のがりいきて、さらに見えず。この衣をみな着破りて、返しおこすとて、それに雉、雁、鴨をくはへておこす。(大和・一六七・402、同: 44の(15a))

これらのトテは主節主体の動きを表す動詞終止形に接続し、動詞終止形で表される前件の動作の完遂に向かっていく主体が、その途中で後件の動作を引き起こすという意味構造を作っている。拙稿(2016)ではこのようなトテを特殊用法のトテと呼び、引用助詞のトテと区別しつつ分析を行った。この特殊用法のトテと⑤の「として」とを比較すると、次のようなことが言える。

(65) では、⑤の用法の「として」と同様の構造が作られている。すなわち、前件の行為を完遂しようとする主体が、その行為の一環として後件

の行為に及んでいる。両者の用法には共通する部分があると言って良い。

(66) では、主体はやはり前件の行為を完遂しようとしているが、後件の行為はそれとは全く別の事柄を表している。伊予国から上京することと、その途中で親を海に落とすこととは、同じ時空間上の出来事ではあるが、別の事柄であろう。⑤の用法の「として」は、こうした用例がほぼ⁽¹⁰⁾見られない。

(67) では、主節主体に対する尊敬語「大殿籠る」が用いられている。拙稿(2016: 40-41)ではこのような尊敬語を受ける用例が多いことに着目して、特殊用法のトテは主節主体自身の言葉を引用するものではないとした。訓点語では一般にこうした尊敬表現が貧困だが、⑤の用法の「として」も、次のような用例がわずかながら出る(続日本紀宣命に2例、金光明最勝王経(西大寺本)に1例)。特殊用法のトテと同様に地の文の要素を承けるものであって、主節主体の言葉を引用するものでないことの傍証となろう。

(69) 然れども慈び賜ふと為て〔慈賜止為亅〕一等降して、其等がねかばね替へて遠流罪に治め賜ふと宣りたまふ天皇が大命を衆聞き食へと宣りたまふ。(宣命・四十三・85)

(70) 願フ王我が命を濟(ひ)たまふとして、児の存と〔与〕亡とを知(らし)メたまへ。(金光明最勝王経・西大寺本・196-9)

(68) では、前接動詞「おこす」が主節の述語として再度現れている。特殊用法のトテには前接動詞の動きの実現を表すという意味特徴もあり、それゆえにこうした用例が時折現れるものと考えられる。これに対し⑤の用法の「として」は、前接動詞の動きが実現していないと解される次のような用例がある。

(71) 彼の仏の名及此の経の名号を称して〔而〕礼敬することを申づとして、「瑠璃金山宝花光照吉祥功德海如来を南謨(し)たてま

(10) 注(9)の用例は、こうした(66)のトテと同様の意味構造と言って良いかと思われる。

つる。」とイへ。(金光明最勝王経・西大寺本・148-7)

- (72) 復次に善男子、若善男子善女人の勝(れ)たる解脱を求むとし
て、世の善を修行せむ、如来及弟子衆を見ルこと得て、親近す
ること得ヌ〔已〕。(金光明最勝王経・西大寺本・27-23)

⑤の「として」は特殊用法のトテとよく似ているものの、以上に見たような相違点があり、用途は限定的である。金光明最勝王経(西大寺本)の加_カ点者は好んで用いたようだが、用途が狭い点はそれ以降の訓点語において間もなく廢れることの一因となっただろう。

5. まとめ

本稿では文相当句を承ける「とす」の用例を観察し、5つの用法に分類して、それぞれの特徴を記述した。要点を簡単にまとめて示したのが表6である。

②は文体的な制約は大きいが「…と言ふ」「…と思ふ」などの一般によく見られる引用構文と同じ構造を持つようであり、現代語の「…とする」に繋がるものと目される⁽¹¹⁾。①③④⑤は文献以前の時代にそれぞれが独自の発達を遂げてきたものであり、一部は古代語においてすでに生産性を失いつつあったようである。これら5つの用法が中世以降にどう展開するかを調査するのは、今後の課題である。

(11) 近藤(1998: 6)は、現代語の「とする」が承ける要素に注目して、「そろそろ帰るとするか」「ご飯を食べに行きましょう」などのように、動詞しか現れない用法の存在を指摘している。近藤によれば、これは発話時の延長上にある時空間に動詞の表す動きが起こる世界を設定するもので、話し手自身がその動きの主体になるという。この用法は古代の④⑤と似ているが、両者の関係は不明である。

表6 文相当句を承ける「とす」の分類

トの 出自	用法分類	用例の形態	出現する 資料	成り立ち・意味特徴など
引用助詞ト	①意図引用	・和文資料では主に「むとす」「じとす」「動詞命令形+とす」 ・訓点資料ではそれ以外の形が若干例	種々の資料	藤田(2000)の示す第Ⅱ類引用構文に由来。主節主体の意図を引用するタイプのものの述部に、具体的な意味を持たない動詞が現れる傾向があるところから生じたと考えられる。
	②考えの内容の引用	感情表出・質問・勧誘・命令を表す形式を承けない。	主に訓点資料	疑いを表す疑問文なども含めた、主節主体の“考え”の内容と言えるような言葉を引用する。発言した言葉を引くものかどうかは不明。
	③複合辞「かとすれば」	「かとすれば」	歌集	「…するかと思うと間もなく」のような訳が可能。後件では前件の動きを妨げるような事態が描写される。
接続助詞ト	④前件事態の完遂に向かう様を描写(未完遂に終わることを含意)	「動詞終止形+とす」に、主としてド・ドモ等の逆接形式が付く	和文資料(和歌が優勢)	主節主体が前接動詞の表す行為を完遂に向かう様子を描くが、その動きの開始局面に達しているか否かは示さない。
	⑤複合辞「として」	「動詞終止形+として」	主に金光明最勝王経(西大寺本)	前件の動作を完遂しようとする中で、その動作の一環として後件の動きを起こすことを表す。

依拠テキスト(用例の引用に際し、句読点・括弧の付け方、漢字の字体、送り仮名の付け方を一部変更し、踊り字はその指し示す文字に置き換えた。また、筆者による解釈や補足を [] に示した。)

上代 ○万葉集……新編日本古典文学全集 ○延喜式祝詞……沖森卓也(1995)『延喜式祝詞総索引』古典研究会 ○続日本紀宣命…北川和秀(1982)『続日本紀宣命 校本・総索引』吉川弘文館

中古・散文系資料 ○竹取物語・伊勢物語・平中物語・土佐日記・落窪物語・蜻蛉日記・大和物語・枕草子・源氏物語・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・堤中納言物語……新編日本古典文学全集 ○宇津保物語……室城秀之(1995)『うづは物語 全』おうふう ○夜の寝覚・浜松中納言物語・栄花物語……日本古典文学大系

中古・歌集 ○古今和歌集……新編日本古典文学全集 ○後撰和歌集・拾遺和歌集・後拾遺和歌集……国文学研究資料館『古典選集本文データベース』(正保版

本「二十一代集」○私家集・私撰集・歌合（後拾遺和歌集成立までの諸作品）……新編国歌大観

中古・訓点資料 ○大乘阿毘達磨雜集論……鈴木一男（1954 a）「聖語藏御本唐写 大乘阿毘達磨雜集論 調査報告その一」『訓点語と訓点資料』2 ○四分律、願經四分律（岩淵本）…大坪併治（2001）『石山寺本四分律古点の国語学的研究』風間書房 ○願經四分律（小川本）……大坪併治（1958）「小川本願經四分律古点」『訓点語と訓点資料』9 ○願經四分律（聖語藏本）……鈴木一男（1979）『初期点本論攷』桜楓社 ○金光明最勝王經（唐招提寺本）……稲垣瑞穂（1954）「唐招提寺本金光明最勝王經の白点」『訓点語と訓点資料』1 ○成実論（卷十一～十六、十八、二十一～二十三）……稲垣瑞穂（1954 a）「東大寺図書館藏本成実論天長点上」『訓点語と訓点資料』2、同（1954 b）「東大寺図書館藏本成実論天長点下」『訓点語と訓点資料』3、鈴木一男（1954 b）「聖語藏御本成実論卷十三天長五年点訳文稿」『奈良学芸大学紀要』4-1、同（1955）「聖語藏御本成実論卷十八天長五年点について」『奈良学芸大学紀要』5-1、同（1956 a）「聖語藏御本成実論卷十一天長五年点訳文稿」『書陵部紀要』6、同（1956 b）「聖語藏御本成実論卷十六天長五年点」『奈良学芸大学紀要』5-3、同（1957 a）「成実論卷二十二天長五年点」『書陵部紀要』8、同（1957 b）「東大寺図書館藏成実論卷十五天長点」『南都仏教』3、同（1957 c）「東大寺図書館藏成実論卷二十一天長五年点」『訓点語と訓点資料』8、同（1962）「聖語藏御本成実論卷十四天長五年点」『奈良学芸大学紀要』10-2、同（1966）「成実論卷二十三天長五年点訳文稿」『南都仏教』18 ○金光明最勝王經（西大寺本）……春日政治（1942）『西大寺本金光明最勝王經古点の国語学的研究』勉誠社 ○大唐三藏玄奘法師表啓……築島裕（1955）「知恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓古点」『訓点語と訓点資料』4 ○妙法蓮華經（山田本）……築島裕・小林芳規（1956）「故山田嘉治氏藏妙法蓮華經方便品古点积文」『訓点語と訓点資料』7 ○金光明最勝王經註釈……田淵雅生（1987）「東大寺図書館藏本金光明最勝王經註釈の訓点」『訓点語と訓点資料』76 ○大智度論……大坪併治（2005）『石山寺本大智度論古点の国語学的研究 上』風間書房 ○地藏十輪經（東大寺図書館本）・妙法蓮華經玄賛・法華義疏……中田祝夫（1954）『古点本の国語学的研究 総論篇 訳文篇』勉誠社（1989年の改訂版に拠った）○春秋経伝集解…小助川貞次（2008）「有鄰館藏『春秋経伝集解 卷第二』积文及び訓読文」『訓点語と訓点資料』120 ○大方広仏華嚴經……大坪併治（1992）『石山寺本大方広仏華嚴經古点の国語学的研究』風間書房 ○四未曾有經……春日和男（1954）「聖語藏御本四未曾有經試読」『訓点語と訓点資料』2 ○百法顯幽抄……稲垣瑞穂（1976）「東大寺図書館藏本 百法顯幽抄古点」『訓点語と訓点資料』58 ○弁中辺論……築島裕（1954）「聖語藏 弁中辺論天曆点」『訓点語と訓点資料』1 ○漢書楊雄伝……大坪併治（1975）「漢書楊雄

伝天曆点解説文』『岡山大学法文学部学術紀要』36 ○大唐西域記……曾田文雄 (1960)『興聖寺本 大唐西域記卷十二併解説文』『訓点語と訓点資料』14、同 (1961)『興聖寺本 大唐西域記卷十二併解説文-「贊」以下の部-』『訓点語と訓点資料』15 ○無量義經……兜木正亨・中田祝夫 (1979)『無量義經古点』勉誠社 ○無畏三蔵禪要……花野憲道 (1990)「随心院蔵「無畏三蔵禪要」訓読文並ヒニ解説-平安中期角筆点(慈覚大師点)-」『訓点語と訓点資料』83 ○八字文殊儀軌……井上親雄 (1968)「広島大学蔵八字文殊儀軌古点-本文・校異・訳文-」『訓点語と訓点資料』39 ○不動儀軌……月本雅幸 (1980)「東寺蔵不動儀軌万寿二年点」『訓点語と訓点資料』65 ○護摩蜜記……小林芳規 (1954)「西大寺蔵本 護摩蜜記長元八年訓点の訓読文」『訓点語と訓点資料』1 ○不空羂索神呪心經……小林芳規 (1958)「西大寺本 不空羂索神呪心經寛徳点の研究-釈文と索引-」『国語学』33 ○惠果和上之碑文(東大本)……山口佳紀 (1966)「東大國語研究室蔵 惠果和上之碑文古点-解説文と調査報告-」『訓点語と訓点資料』33 ○南海寄帰内法伝・妙法蓮華經(龍光院本)……大坪併治 (1968)『訓点資料の研究』徳間書房 ○梵字悉曇字母并釈義……月本雅幸 (1994)「仁和寺蔵梵字悉曇字母并釈義治暦四年点」『訓点語と訓点資料』93 ○惠果和尚之碑文(高山寺本)……山口佳紀 (1967)「高山寺蔵惠果和尚之碑文古点」『訓点語と訓点資料』35 ○大日經義釈……松本健二 (1961 a, b・1962・1963・1964)「大東急記念文庫本大日經義釈卷第十三併解説文(一)~(五)」『訓点語と訓点資料』16・17・23・27・28 ○大慈恩寺三蔵法師伝(A・B点のみ)……築島裕 (1965)『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝古点の国語学的研究 訳文篇』東京大学出版会 ○蘇磨呼童子請問經……築島裕・小林芳規・月本雅幸・松本光隆 (1995)「仁和寺蔵本蘇磨呼童子請問經承暦三年点訳文」『訓点語と訓点資料』95 ○大毘盧遮那成仏經疏……高山寺典籍文書綜合調査団 (1986)『高山寺古訓点資料 第三』東京大学出版会

※用例検索に際して次のデータベースを利用した。

○新編日本古典文学全集、国文学研究資料館『古典選集本文データベース』、『延喜式祝詞総索引』、『続日本紀宣命 校本・総索引』……国立国語研究所『日本語歴史コーパス』バージョン 2022.10 <https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/> ○日本古典文学大系……国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』https://base1.nijl.ac.jp/infolib/meta_pub/CsvSearch.cgi ○新編国歌大観……(株)古典ライブラリー『日本文学 Web 図書館』

参考文献

大坪併治 (2015)『平安時代における訓点語の文法 下』風間書房
勝又隆 (2020)「上代におけるミ語法と「動詞終止形+ト」節の構文構造」青木

- 博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究 5』ひつじ書房 pp.21-40
- 近藤研至（1998）「「トスル」についての覚書」『文教大学国文』27 pp.1-15
- 桜井光昭（1981）「推量の助動詞」鈴木一彦・林巨樹『品詞別日本文法講座 7 助動詞 I』明治書院 pp.151-221
- 鈴木泰（1977）「指定辞トシテ、ニシテの句格」松村明教授還暦記念会編『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』明治書院 pp.347-365
- 関一雄（1993）「「入り給ふとすれど」（源氏物語・空蝉）考」小松英雄博士退官記念日本語学論集編集委員会『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂 pp.355-366
- 竹内史郎（2005）「上代語における助詞トによる構文の諸相」『国語語彙史の研究』24 pp.167-184
- 辻本桜介（2016）「主節主体の動きを表す動詞終止形に接続するトテについて－引用と異なる機能の分析－」『日本語の研究』12-2 pp.35-51
- 中村幸弘（2017）「『古今和歌集』歌に見る「…とす」「…といふ」「…と思ふ」の陳述の機能」『国学院雑誌』118-5 pp.53-70
- 藤田保幸（2000）『国語引用構文の研究』和泉書院
- 藤田保幸（2001）「引用形式「～トスル」の表現性－「当局は、早急に調査するとしている」などの表現について－」『国語語彙史の研究』20 pp.271-285
- 吉井健（2020）「「動詞終止形＋ト」を前件とし後件に引用動詞を持たない文の位置づけについて」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究 5』ひつじ書房 pp.1-20

[付記] 本稿は、令和4年度 JSPS 科研費（課題番号：22K00578）による研究成果の一部である。

（つじもと おうすけ・関西学院大学文学部助教）